



12
「橙」

エスカレーターに100回乗ったとしたら、そのうち1回くらい、なんとなく思い出す。

ここでは本当は、誰も歩いちゃいけないらしい。二列に並んで、立ち止まって運ばれていくのがルールだって。

だけど、ほとんどの人は右側を歩いたり、左側に立ったりしている。今日の僕は100回に1回の日だったのだが、にもかかわらずちよつと歩いてしまった。ここにザンゲをしたい。

今日はさらにもう一步考えてみる。こんなの1000回に1回かも。

「^{ふさ}もしも極端に真面目な人がいて、二列になり、ゆく手を塞いだらどうなるだろう?」。あるいは、「本来のルールを逆手にとり、わざと通せんぼして、絡んできた人に正論をぶつける者がいたら?」。

厄介な正義。相手がものすごく短気な人だったら……ひととおり想像し、ちよつとこわくなり、僕は思わず左側に寄りかかる。右足を誰かのバッグがかすった。

急いでいても、特にそうでなくても、エスカレーター自体は変わらずに一定のスピードで動いている。自分がせかせかしてても、ぼんやりしてても、勝手に上へ連れていくてくれるのだ。

そういうところが僕はちよつと好きだったりする。

中腹を過ぎたあたりで、前にいた若い男性がハッと後ろを見た。行き先を間違えたのに気がついたのか、忘れ物でもしたのか。でも逆走はできない。仕方なく上まで登りきり、その後また下ってゆくのだろうなと思ったら、ホームにとどまっていた。

なんだ、ちよつと振り返っただけだったか。僕があれこれ考えていたから、勝手な想像が働いたのかもしれない。

エスカレーターを降りれば、またそれぞれのペースに戻る。速足で去り行く人もいれば、スマホを眺めながらゆっくり歩く人もいる。

でも、あの短い間だけは、同じ速度で運ばれて、同じ方向にむかっていた。人生で同じ船に乗り合わせる人というのも、これと似ているような気がする。

その時、同じ場所にいた。同じほうを向いていた。

単なるいつときの偶然と捉えるか、何かしら意味を感じとるか、それはその人次第だ。

誰かと同じ時を過ごしたこと。

たとえばほんの少しの時間でも、心のどこか、隅の方にも残っている気がする。

そんなことを考えながら、オレンジ色の電車に乗り込んだ。
だ。